

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月18日(金)
その2

◇ 登校時の持ち物 検討中 その①

大柳地区から登校してくる1年生のOさん。

校内では大変元気がよいが、登校時はその元気が感じられない。毎朝の光景だ。4 km弱の通学。しかも下りが多いとはいえ坂道だ。下りは日常とは異なる部分の筋肉を使う。滑りやすい条件もあり、力の入れ具合を加減する必要もある。登校時にOさんの元気が出ないのは、通学するだけで疲れてしまうのである。

通学距離だけではない。ランドセルをはじめとする荷物の重さが負担に輪をかける。加えて、コロナ予防のマスクが呼吸を妨げる。三重苦である。

一方、米河内地区の児童の通学路は、上り坂が続く。しかも結構な勾配だ。

猛暑の夏季は、正門から玄関に続く桜階段の途中で休憩をする児童の姿もあった。マラソンに例えるなら、40 kmを過ぎてからの最後の登り、箱根駅伝に例えるなら、往路5区の登りと言ったところか。しかも、マラソン選手は軽装備に対し、児童は背中に大きな荷物を背負う。給水所もないから、水筒持参である。低学年の児童が一気に登るのは、大変過酷なのである。

だから、大柳が最後に正門を通過するときは、桜階段でOさんのランドセルを支えてやることにした。他の団員からは、「Oだけずるい…」なんて声は上がらない。低学年の頃は苦労していたことを自身が経験し、ちゃんとわかっているのだ。

すると、かなりの段数と勾配のある桜階段で、Oさんはスピードが上がる。調子がいい時は他の団員を追い越していくことさえある。三重苦の一番の苦は、「ランドセルの重さ」だったのである。

現在、「ランドセルの中身」と「その対処法」について、学校で検討中である。学校に用具を置く「置き用具」が主な方策となろう。ここで大切なことがある。

児童の「自治意識の涵養(かんよう)」「自治意識の陶冶(とうや)」である。

何かを行うには、必ずリスクが伴う。置き用具ならば紛失だ。これを児童の自治によって防ぐことができるように、教師が仕向ける必要がある。

正義感育成の成果は、児童が大人になったとき、日本の力と姿を変えるのだ。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月21日(月)

◇ 登校時の持ち物 検討中 その②

児童の登校時の持ち物の検討に向け、現在、学校は、様々な形で動いている。

- ①職員会議での校長からの指針発表
- ② ①を受けての現状把握（現在の各担任の取組）
- ③ ①を受けての担任の考えの集約
- ④児童の実態調査 ※ランドセル重量の実測
（持ち物の総重量ではなく、ランドセルのみ）
- ⑤保護者会を利用しての保護者の考えの収集
- ⑥ ②から⑤を受けての生活指導担当による起案

現状はここまで。

今後は、⑦起案の検討

- ⑧教員の共通理解を図るための決議会議
- ⑨実施準備 ※保護者への通知等
- ⑩全校集会での児童への運用発表・注意点の説明
- ⑪児童の自治意識の涵養 ※随時
- ⑫テストケース開始＋⑪
- ⑬実施の見直し・改善案＋⑪育成のための方策

できれば、テストケースは3学期の頭で開始し、3学期の間でテストケースを見直し、改善を図りながら、来年度から本実施を行う計画である。

課題は⑪だ。

随時指導が重要である。常時「特別の教科 道徳」の授業を行うようなものだ。正直言って、担任からしてみれば大変であろう。相手は大人ではない。中学生でもない。小学生である。しかも、児童は発達段階が幾段（※学年＝発達段階ではないと考える）もあり、その段階に応じた手立て、さらには個に応じた手立てが必要となる。

しかし、自分が実施を決断したのは、2つ理由がある。

④児童の素養

- ・素直で真面目。
 - ・担任（教員）の言うことをしっかり聞き、実行しようとする。
 - ・「ダメなものはダメ」「ならぬものはならぬ」認識がある。
- こうしたプラスの素養を児童が備えている。素晴らしいことだ。

これは、家庭教育がしっかり、地道になされている証といえる。加えて、これまでの学校生活における児童相互の自浄効果、そして、担任陣の指導の成果といえよう。

★素養が備わっているからこそ、一段高い「自治も可能」である。

⑧実施時期

4月から数えること8か月。担任は児童と向き合うことで、信頼関係を構築してきた。この関係は大きい。同じ担任の話でも、4月や5月、6月と今とでは、児童の受け止め方が違う。

★「この時期だから、やれる」と考えた。

よくよく考えれば、時間と手間はかかるかもしれないが、登校時の持ち物の見直し（置き用具の検討）を図ることで、児童の生きる力となる【道徳心の涵養】という大きな副産物を養うことが期待できる。

「時間割を見ながら、自分で考えて用具をそろえる」などのことは少なくなるかもしれないが、保護者の皆様には、是非、学校の取組にご理解いただきたい。

ただし、学校としては一律には方法を設定せず、【柔軟なもの】【工夫できるもの】を考えている。さらに、【児童の発達段階に応じた対応】が重要であると考える。

例えば、1・2年生ならば、【担任が学校に置いていくものと家に持ち帰るものを細かく指示を与え、その指示に沿って対応できる】ようにする。

これは、【伝え聞いたことや文字で明示されたことを自分で確認する】という重要な行程を経る。当然、担任も確認は行う。すぐに児童ができることは担任も期待していない。児童が、助けを借りずとも、自分で、一人でできるようになることをねらいとしている。

一方、5・6年生ならば、【学校に置いていくものと家に持ち帰るものを自分で判断して対応する】。

したがって、全員が同じにならず、学校に置いていくものと家に持ち帰るものが、個々で異なる場合も生じてくる。

家庭学習に必要なものを自分で判断する。毎日持ち帰ってもよいし、日ごとに異なってもよい。図画工作の材料の準備のために必要であると思えば、教科書を持ち帰るなどのように自分で決める。

ねらいとするもの、児童が身に付ける力は【自分で考えて、判断する力】だ。失敗があれば、当然指導も受ける。失敗が経験になればいいのである。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月22日(火)

◇ 登校時の持ち物 検討中 その③

児童の登校時の持ち物の検討と対応について、学校は様々な形で動いている。

- ①職員会議での校長からの指針発表
- ② ①を受けての現状把握（現在の各担任の取組）
- ③ ①を受けての担任の考えの集約
- ④児童の実態調査 ※**ランドセル重量**の実測(R2.12.14～18)
- ⑤保護者会を利用した保護者の考えの収集(R2.12.15,18)
- ⑥ ②から⑤を受けての生活指導担当による起案

現状はここまで。

さて、ここで④の**ランドセル重量**の実測結果を公表したい。

曜日（時間割）によって学習内容は変わるので、当然持ち物も変わることから、1週間実測「12/15(月)から19(金)の5日間」を行った。

実測結果は、以下のとおり。

◇ランドセル重量調査 調査期間：12/14(月)～18(金)					
	14日(月)	15日(火)	16日(水)	17日(木)	18日(金)
1年生平均	3.90kg	3.52kg	3.94kg	3.60kg	3.04kg
2年生平均	4.54kg	4.37kg	4.25kg	4.16kg	4.18kg
3年生平均	5.48kg	4.82kg	5.24kg	5.20kg	5.00kg
4年生平均	4.58kg	4.14kg	4.15kg	4.47kg	4.51kg
5年生平均	5.93kg	4.55kg	5.14kg	5.64kg	5.69kg
6年生平均	4.71kg	4.53kg	4.59kg	4.83kg	4.81kg
全児童平均	4.87kg	4.34kg	4.55kg	4.67kg	4.61kg
マス色について	4.0kg未満		4.0kg以上		5.0kg以上

数値の高さに驚かれたことだろう。しかし、まず、お伝えしておかなければならないことは、これまで何も手を打たなかったわけではない。教員間での話し合いに基づく対応・改善・工夫を重ねてきた経緯がある。それでもこの状況だ。

理由は一概にはくくれないが、教科書の紙質がよくなったほか、写真や資料が充実したことで教科書が大判になったり、厚みが増えて重さを増したりしていることが大きい。

教科書そのものが、教科書一冊一冊が重いのである。

ここで、少々余談を。

岡崎市教育委員会が展開する【GIGAスクール構想】による岡崎市の教育環境整備に注目していただきたい。

- 主な整備は、 ①【Myタブレット（iPad）の配付】
②OKリンク【おかげキッズ・学びの応援サイト】
<http://www.oklab.ed.jp/weblog/>

①のハード面、②のソフト面、両面での環境整備がされた。

現在の【Myタブレット】の状況は、小学校4年生から6年生の児童一人一人に貸与（※中学校3年生まで個人で活用する）されたMyタブレットを学校で管理し、授業で活用している。（※1年生から3年生については、3学期に貸与開始）

ざっと評価すれば、自分のペースで学習を進めることができるほか、自分が調べたいことの検索等、追究学習の学習効果は絶大である。

さらに、様々な活用方法が期待でき、学習に及ぼす「伸びしろ」は計り知れない。

岡崎市の取組は全国の最先端の位置にある。他郡市も追随したいところだが、タブレット自体の確保が難しく（生産が追い付かない）、全国で同様の対応ができるまでには、相当の時間を要するだろう。

整備が整えば、デジタル教科書の本格導入も検討される。 そうなれば、タブレット一台携えての登校も夢ではない。

その来るべき時期に対応するために、学校でもデジタル教科書も併用して授業を行っているところだ。（※現状では、タブレットを家庭に持ち帰ったところで、Wi-Fi環境があってもライセンス問題で家庭では利用できない）

話を戻そう。

全国の小中学校の児童生徒へのタブレット配備が完了する近未来には、電子教科書の導入により、必ずや登校時の持ち物は減少する。

それまでの間、「家庭での学習に支障がない」ように、さらに「自分で考え、判断する力をつける」、「道徳心を高める」ことも含め、【登校時の荷物の軽量化】と【学校での置き用具】について、学びの保障を踏まえた上での思い切った取組を進めたいと考えている。

現状での負担斤量の具体的な数値が把握できた。続くテスト試行は3学期。

目指すは、背負うランドセル3kg台。 できるならば、1年生は2kg台。

児童が負担減少を体感できるレベルで。 成果は、子供たちの表情を物差しに。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月23日(水)
その2

◇ 日本の文化 年賀状

ニュースによれば、今年は年賀状を書く人が増えているとのこと。新型コロナの影響で帰省もおぼつかなくなり、代わりに「年始の挨拶に年賀状でも書こうか」ということらしい。

日本人が年始の挨拶を大切にしていたことが分かり、少しほっとした。

SNSの進化と浸透に伴い、若者世代を中心に「年賀状離れ」が進んでいる。手間もかからず、タイムラグ（時間的なずれ）もほとんどないのが、LINEやメールをはじめとするSNS。画像はもちろん、手書きの文字まで送れる。便利と言えばそうだが、日本には受け継がれてきた文化がある。年賀状もその一つだ。

思い起こせば、「プリントゴッコ」が登場した時は衝撃的であった。それまでは一枚一枚手書きで行っていた年賀状作りが家庭で印刷できるのだ。まさに年賀状の革命だったが、パソコンと家庭用プリンターの普及により姿を消していった。…懐かしい。

パソコンで年賀状を作るようになってからは、ほとんどその年の印象はない。あて名書きから裏面の構成までちょちょいのちょい。最後にパソコンのエンターキーを押せばプリンターが勝手に印刷してくれる。あとはポストに出すだけ。しかし、苦勞をしないと、他のところに影響が出る。せっかくいただいた年賀状。その見方が変わってくる。

自分が苦勞したものや、自分が思い入れをもって臨んだものは、同様のものを目にした時、

いただいたとき、相手の苦勞や思いに自分を重ね合わせ、じっくり時間をかけて対するものだ。

それに気づいた時から、年賀状のあて名だけは全て手書きで行ってきた。

手間はかかるが、いただいた年賀状を見る時間は、間違いなく増えた。

本校の年賀状にかかわる素敵な取組がある。年賀状コンクールへの応募である。

郵便局が主催する催しだが、コンクール提出用の用紙のほか、本物の年賀状を一人一枚いただける。1・2年生は学級で、3年生以上は書写の時間を使って年賀状作りを行っているが、本物の年賀状は誰に書いてもよく、自分で考えて年賀状を作る。

出来上がった年賀状のあて名を見ると、おじいさんやおばあさんが多い。ここが素敵である。

手書き主体世代の祖父母が受け取る「孫の手書きの年賀状」。お宝以上の価値がある。

何より、おじいさん、おばあさんに書こうとする児童の優しさがうれしい。そして、日本の文化を大切にし、日本文化のよさを児童に伝えようとする職員の心意気がうれしい。

今年1年間、ありがとうございました。皆様、よいお年をお迎えください。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年1月7日(木)

◇ 大掃除を経て、滝山寺のすごさを知る

あけましておめでとうございます。今年もよろしく申し上げます。

さて、昨年末。令和2年を締めくくるにあたり、校長室の拭き掃除と掲示物の刷新を念頭に置いて整備にとりかかる。しかし、いざ始めてみると、掲示については刷新というよりも厳選の方向に。大半の掲示は、校内壁面各所に移動させた。校長の独占よりも皆で見る方がよい。

「これだけは」と校長室に残した掲示が4点ほどある。

- ①安戸にあった旧校舎の校舎写真
- ②本年度の航空写真（①の隣りに）
- ③校長就任時に知り合いから頂いたドライフラワーのリース
- ④滝山寺三尊像写真（聖観音菩薩立像・梵天立像・帝釈天立像）

自席の左側に①と②、右前方に③、正面（校長室扉上）に④を配置し、視線を上方に移せば全てが視界に入ってくる



◀左：航空写真
右：旧校舎

ドライフラワー
リース▶



◀滝三寺三尊像

- 左：帝釈天立像
中：梵天立像
右：聖観音菩薩立像

写真撮影すると、梵天立像の上に神々しい光が……蛍光灯の反射です。

この場をお借りして、「滝三寺三尊像」について説明したい。

実はこの三尊像、【運慶作】である。

※湛慶（運慶の子）との合作

運慶作と言え、東大寺南大門の「金剛力士像※国宝」、通称「阿吽（あうん）の像」が有名だ。



ちなみに、「阿吽の呼吸」の由来が「阿吽の像」にあるとの見解は微妙なところで、神社の「狛犬（こまいぬ）」の方が歴史的には古いらしい。

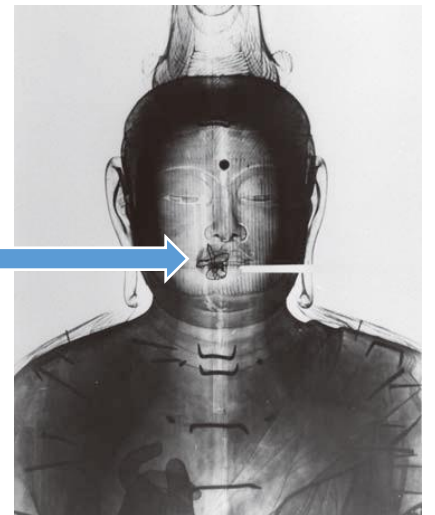
<滝山寺がすごい理由>

運慶作と認められた現存する仏像は、全国に31体しかない。

関東が13尊、近畿が15尊、そして愛知・岡崎市・滝山寺の聖観音菩薩立像をはじめとする3尊（分散なし）であるから、いかに歴史的価値が高いかが分かる。国宝に極めて近い国定重要文化財である。

【聖観音菩薩立像】は、調査によりX線透視撮影をした際、頭部内に針金でつるした小さな紙包みが発見される。もともと滝山寺に伝わる縁起（書物）の中でこの存在が綴られていたが、科学により立証された形だ。

頼朝と等身大の【聖観音菩薩立像】頭部の紙包みの中身は、【鎌倉幕府開府の源頼朝の歯と鬚（あごひげ）】。つまり、頼朝の形見である。※髭（口上ひげ）、髯（頬ひげ）



滝山寺に残る三尊像は、源頼朝の三回忌に向けて制作されたもので、常磐の滝山寺で三回忌法要が行われているのである。

この法要を行ったのが【式部僧都 寛伝】。源頼朝と唯一無二の友であり、滝山寺の住職である。

法要が行われたのは1201年。年月にして780年前だ。

800年近い長い年月を経ても三尊像が散財せず、よい状態のまま現存する奇跡が滝山寺にはある。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年1月12日(火)

◇ 登下校時の持ち物④

裏面のご案内【登下校時の持ち物の軽量化について】にあるように、持ち物の軽量化に向けていよいよ動き出す。

まずは試行期間（来週18日の月曜日から開始し、1月中）を設け、試行実施の状況を見て再検討し、必要に応じて見直しを図っていく。本格実施は令和3年度からという流れだ。

方法の基本は、教科書等の用具を学校に置く【置き用具】である。

しかし、心配がないわけではない。そこで実施に際し、3学期始業式の式辞の中で「実施の意図」と「方法」、そして「注意点」について子供たちに話をした。特に重きを置いたのは【注意点】だ。

『自分たちの生活は、自分たちで守る』

『自分たちの生活は、自分たちでよくしていく（向上させていく）』

『自分たちの権利は、自分たちで守る』

『注意すべきことは、自分たちで声をかけていく』

『学校や学級の安全は、自分たちでできることを行って保守する』

いわゆる【自治】と【自浄】である。

置き用具については、見直しが行われていない学校が多い中、すでに常磐中学校は昨年度から実施している。多目的の指定カバンはあったが、生徒に任されて完全自由化されるなど、市内でも先進的だ。本校の児童は基本的に常磐中学校に進学することから、今のうちに「自分で判断する」ことを習慣づけることは、スムーズな移行につながる。さらに、道德心を高め、自治力と自浄力を向上させることは、【生きる力】となって人生を支えていくことになる。

実施前には心配は尽きないし、実施後は予想しない問題も出てくるだろう。

しかし、まずはやってみる。そこで改善を加えていく。

保護者の皆様には、様々な心配をおかけするが、是非ご協力いただきたい。

問い合わせの窓口を教頭としたので、実施前に心配なことがあれば、気兼ねなく問い合わせ願いたい。よろしく申し上げます。

令和3年1月12日

保護者 各位

岡崎市立常磐東小学校
校長 近藤 善紀

登下校時の持ち物の軽量化について

初春の候、保護者の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。また、日頃は、本校の教育に対し、格別のご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

さて、登下校時の持ち物の軽量化について、昨年から職員で検討してまいりましたが、下記のとおり軽量化の試行期間を設けて実施することとなりました。その後については、方法等を見直し、来年度より本格実施を行う予定です。本件につきまして、何卒、ご理解、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

記

1 期 間 1月18日（月）～29日（金）

2 登校時の持ち物について

1～3年

宿題等、家庭学習に必要なものや、教師が持ち帰るように指示したもの以外は基本的に学校に置いておく。

4～6年

学校に置いておくものと家に持ち帰るものを自分で判断し、対応する。

3 学校に置いておく用具（置き用具）の保管について

教室の児童用ロッカーに教科書やノートを保管する。児童は、登校したら、ロッカーからその日に必要な教科の用具を取り出して準備し、机の中に入れて授業に備える。下校時には、置いておく用具をロッカーに入れる。

4 試行期間の実施後（2月以降）について

試行期間後、実施して明らかになった問題点を修正し、再び再試行を行うて方法の検討を重ね、来年度から本格実施する。

5 保護者の方へ

施行前および試行時に、お子様の様子などで気になることがございましたら、教頭まで電話でお伝え願います。

（問い合わせ先：常磐東小学校 教頭 鈴木紀予子 電話 46-2108）

常磐東小学校 校長だより

常なる磐

つねなる いわ

令和3年1月15日(金)

◇ 校内書き初め会

校内書き初め大会。本当に価値のある本校独自の素敵な行事である。



ご覧のように全校児童が体育館で書き初めを行う。
密を避けても実施できるのが本校の強みである。

6年生の書き初めの文字は【伝統を守る】。正座をし、書に正対する。
今の、伝統を守る行為を文字に認める（したためる）。まさに書の道。書道だ。

12月の教室。書写の時間を使った書き初めの練習を覗いた際も、机を後方にずらし、空間を作って書き初め用のスペースを確保し、大会と同様の方法で練習していた。児童が教室に20名もいれば、とてもできない。これも本校の強み。

写真を見てもらってわかるとおり、とても姿勢がよい。整理整頓もできている。学校の書道の時間だけでなく、冬休みの宿題も同様にお行儀よくやれていたことだろう。

教育課程で決められているとおり、書道は3年生以上で行う。1・2年生はどうかといえば、国語の時間に文字を練習している。

一番伸びていると感じたのは1年生である。休校期間中の定期登校の頃には、ひらがなの練習だった。縦横一画を書くのさえ苦勞していたが、今は違う。

ご覧のように姿勢もよい。背筋が伸びる子供の姿は美しい。



2年生も負けていない。



流石の上級生。筆だけでなく、半切の用紙の扱い方も手慣れたものだ。



本校では、3学期の始業式直後に行うのが「校内書き初め大会」。
まさに最初の行事である。

書き初めに真摯に対峙する子供たちの様子を見て、本当に安心した。
そして、令和3年、47名のそれぞれの学校生活が最高の形でスタートした。



常なる磐

つねなる いわ

令和3年1月15日(金)

その2

◇ 二度目の緊急事態宣言を受けて

13日(水)に菅総理大臣より、新型コロナウイルス感染症に係る「本県の緊急事態宣言・特定警戒都道府県への追加」が発令された。

心配な点は、関東圏のみならず、本県・本市でこれだけ急加速度的に感染者が増加しているのに対し、国民・市民の切迫感が薄れてしまっていることである。新型コロナウイルスという言葉を目にする機会が増えたことによる「音の響きの慣れ」が、危機感を薄めてしまっている。

緊急事態宣言の発令も二度目で、これにも「慣れ」てしまわないか懸念が残る。

国や県の店舗の自粛営業等の指示を守ることが大事ではなく、事の重大さを受け止め、あくまでも個人が気をつけて生活することこそ最適解なのである。

今一度、子供の範となる大人が、大人こそが気を引き締めたいものだ。

対して、子供は大変げなげである。学校の新しい生活スタイルをすっかり自分のものとし、自分では気づかぬ間に自己衛生管理能力を高めている。これも、毎日継続して行ってきた徹底した手洗いや、確実なマスク装着が、「慣れ」によって「行為に対する面倒な気持ち」を薄めた結果だ。間違いなく大人たちより徹底的に行っている。こうした子供たちの姿に、本校保護者の高い家庭教育力が見える。本当に学校としては有難いことである。

報道によれば、市内の小中学校で教職員の感染が報告された。自分の見解としては、「2000人を超える関係者がいるのに、よくここまで出なかったものだ」というのが正直なところだ。本市の教職員のレベルの質も高い。本校の教職員の状況を見ても、本当に気をつけて生活しているのが分かる。

しかし、岡崎藤田保健衛生大病院のある学区の学校がそうだったように、報道が一旦世に出てしまうと、情報は瞬く間に拡散し、誹謗中傷のやり玉にあがる可能性もある。本人からしてみれば身を切られるようなつらい情報公開であるが、情報を伝えることで目の前の子供たちを守る最適解なのだ。悪口は慎むべきだ。

今こそ、さらに禪(ふんどし)の紐を締めなおす段階にあると教職員が肝に銘じ、子供たちがけなげに行っている行為をエネルギーとしながら徹底した感染症対策を講じていく。

常なる磐

つねなる いわ

令和3年1月22日(金)

◇ 防災と言えは…

緊急事態宣言の発令を受け、学校は徹底した衛生管理の他、授業参観や資源回収の中止等、行事の見直しを図るなど、感染防止に向けた取組に拍車がかかった。

6年生は、総合的な学習の時間で防災についての学びを進めている。防災学習の一環として、講師の大山恭司さんを招聘しての救急法の授業も中止の判断を下した。授業の進め方も見直しが必要となる。子供のみならず、担任教師の落胆の大きさは想定外であったが、落胆＝授業に懸けるエネルギーの表れでもある。

本校では6年生で防災学習を行い、その成果を後輩たちに伝える伝統がある。6年生はこれまでの5年間、その教えを受けてきた。そして、いよいよ自分たちの番だと、熱量をあげて学習に取り組む。役割を担い、全うする自負があるのだ。子供たちの学び熱に担任も感化されるのだろう。とても素敵なサイクルだ。

これまで積み上げてきた成果が評価されて表彰を受けるなど、本校は防災教育における輝かしい歴史がある。今年度は、その歴史に新たな流れができそうな動きがある。4年生が、社会の学びと関連させ、防災の学びを広げる試みがあった。新しいページの追加だ。さすがの「防災と言えは常磐東小」である。

「防災と言えは…」この言葉を聞くと、ある学校の卒業式の場面が脳裏をよぎる。宮城県にある気仙沼市立階上（はしかみ）中学校である。

東日本大震災により、東北地方の学校は大打撃を受けた。物理的なものだけでなく、子供たちの心もである。やるせない悔しさと辛さ、無念さの中、それでも前を向いて立派に生きていこうとする姿が、卒業式で答辞を読んだ代表生徒の文言に表れていた。

YouTube にアップされたニュース映像が削除され、見られなかった時期もあったが、どうやらまた復活したらしい。短く編集されてはいたが…。

やるせなさで心が大きく揺れ動きつつも、前を向いて必死に生きていこうと誓う中学生のたくましさが映像を通して窺い取れる。

「天を恨まず」と称された答辞を裏面に紹介する。

本日は、未曾有の大震災の傷も癒えない最中（さなか）、わたくしたちの為に卒業式を挙行していただき、ありがとうございます。

ちょうど10日前の3月12日。春を思わせる暖かな日でした。

わたくしたちは、そのキラキラ光る日差しの中を希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎を57名揃って巣立つはずでした。

前日の11日。一足早く渡された、思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、10数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。

「東日本大震災」と名づけられる天変地異が起こるとも知らずに。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外からも高く評価され、十分な訓練もしていたわたくしたちでした。しかし、自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、わたくしたちから大切なものを容赦なく奪っていきました。

天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。

辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は14時46分を指したままです。でも、時は確実に流れています。

生かされた者として顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく事がこれからのわたくしたちの使命です。

わたくしたちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、愛（いと）おしんで過ごして下さい。

先生方、親身の御指導ありがとうございました。先生方が、いかにわたくしたちを思って下さっていたか、今になってよく分かります。

地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしくお願い致します。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これからわたくしたちが歩いていく姿を見守っていて下さい。必ずよき社会人になります。

わたくしは、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成23年3月22日第64回卒業生代表 梶原裕太

防災を学んできたからこそその感情がそこにある。

本校の児童たちも、卒業生も、学びを通して体に残っていくものがある。